

## ごあいさつ

しまねミュージアム協議会では、平成16年度に文化庁の芸術拠点形成事業の支援を受けて、「しまねのミュージアム探検隊～77の謎に挑戦!!」というガイドブックを作成しました。これは、加盟館がそれぞれ自慢の資料1点をクイズ方式で紹介し、それをきっかけにして各館に足を運んでもらおうとするものでした。同時にホームページにも情報を盛り込み、検索ができるようにしました。

そのような中で、美術品や考古資料のジャンルにも属さず、生活に密着し身近であるが故に、その大切さを忘れられてきた民具についてスポットをあてようという動きが出てきました。民具は、昔の人々の知恵の結晶でありながら生活様式の変化により失われ、地域の開発により用をなさなくなってしまったものがほとんどです。

今回の「民具100選」は、今まであまり日の目を見なかった民具資料について100点を選んで作成したものです。所有する加盟館から地域や生業により重要であるとして推薦してもらった資料です。そしてこれをカードにして紙芝居方式で小中学校の授業に使用できるようにしました。「もの」があふれている現在に生きる子供たちに、昔の人間の知恵やそれぞれの地域の特色ある産業に触れてもらい、未来への礎としてもらえれば幸いです。

平成18年3月

しまねミュージアム協議会

会長 勝部 衛

凡例

1. 本資料は、文化庁が実施している平成17年度芸術拠点形成事業の支援を受けて作成したものです。
2. 本資料に掲載している資料は、平成17年度しまねミュージアム協議会に加盟している館が保管・展示している民俗資料から選択したものです。
3. この資料は、次のように分類し、通し番号を付けています。  
衣・食・住・山仕事・農耕・漁撈(海)・漁撈・漁撈(淡水)・たたら・和紙・養蚕・商い・石材業
4. 民具の名称は、県内でも地域により様々ですので、一般的と思われる名称を使用しています。
5. 各民具は、地域性や時期差などで種々ありますが、代表的なものを掲載しています。
6. 掲載の民俗資料及び関連の資料を保管・展示している加盟館は、下記の通りですが、所在地、連絡先などは、下記のURLで表示されるHPをご利用ください。

資料館名一覧

松江郷土館・島根県立博物館・松江市鹿島歴史民俗資料館・松江市立八雲町郷土文化会館・安部榮四郎記念館・出雲玉作資料館・  
宍道菟古館・来待ストーン・浜田郷土資料館・歯の歴史資料館・出雲民芸館・平田本陣記念館・益田市立歴史民俗資料館・石見銀山資料館・  
和鋼博物館・安来市立歴史資料館・江津市郷土資料館・鉄の歴史博物館・可部屋集成館・絲原記念館・横田郷土資料館・  
飯南町歴史民俗資料館・邑南町郷土館・浜田市立金城歴史民俗資料館・津和野町民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・隠岐郷土館・  
海士町歴史民俗資料館

URL <http://www.v-museum.pref.shimane.jp/>

7. 本資料の作成検討委員は、下記の通りです（敬称略）。

浅沼 博（山陰民俗学会）

隅田正三（山陰民俗学会）

三宅博士（山陰民具学会）

村尾秀信（中村中学校校長）

稲田 信（宍道菟古館）

浅沼政誌（島根県古代文化センター）

本間恵美子（島根県立八雲立つ風土記の丘）

平野芳英（荒神谷博物館）

高谷茂男（島根県立八雲立つ風土記の丘）

8. 写真撮影 アイ・フォート 板垣 宏





お茶の道具かな？これを使うと、虫歯予防の効果もあったんだよ。







齋の歴史資料館・邑南町郷土館・絲原記念館・  
飯南町民俗資料館など

お は ぐ ろ どう ぐ

## お歯黒道具 (お歯黒を塗る道具)

### 解説

日本では、古くは男女とも上流階級だけにお歯黒が用いられていましたが、中世あたりからは、女性専用になったといわれています。江戸時代になって、結婚した女性のシンボルとなりました。結婚した婦人は、<sup>まゆ</sup>眉を剃り落とし、<sup>そ</sup>お歯黒をつけて人妻のしるしとしました。江戸時代末期には、お歯黒道具は欠くことのできない嫁入り道具の一つでした。お歯黒は、江戸時代に庶民生活に広くゆき渡りますが、結婚した女性のたしなみとして、いつも気をつけていたと思われま

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

### 現在の姿

お歯黒は、ムシ歯を予防する<sup>こうか</sup>効果がありました。現在では、歯質を強化するためにフッ化ジアミン銀が開発されて、わが国の健康保険にも採用されています。この薬は、主として乳歯のムシ歯予防とその<sup>よくせい</sup>進行抑制のために考え出された薬剤です。

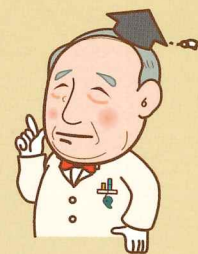
## お歯黒を塗る道具

使  
わ  
れ  
た  
年  
代

江戸時代

使  
用  
し  
た  
人  
々

御大家の女性



と  
く  
ち  
ん

科学的に見れば虫歯予防だったと言われています。

む  
か  
し  
し  
ま  
ね  
資  
料  
館



やんだろ？  
じゅうどうぎ  
柔道着のように強くて丈夫そうだね。







邑南町郷土館・安来市立歴史資料館・  
 飯南町歴史民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・  
 浜田市金城民俗資料館など

# はだこ

## 解説

<sup>のらぎ</sup>野良着です。もともとハダコは「<sup>はだぎ</sup>肌着」のことで、肌に着け着物の下に着るもののことをいいました。しかし、野良仕事に出るときは上の着物を脱ぎ、下のハダコだけになって外に出たので、こう呼ばれるようになりました。肌に着けるハダコと野良着のハダコは、仕立て方が違い、野良着のハダコには、<sup>ひとえ</sup>単衣と<sup>あわせ</sup>袷とがあります。寒くなると袷を着ます。女性は全体として男性より長めに作られます。材料は、男女とも木綿が使われます。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

## 現在の姿

昭和になり洋服が普及すると、洋服は体に密着しているので仕事がしやすいので、野良着は洋服や古洋服に代っていきます。昭和50年代になると、作業用の服が普及していきます。

# 作業のとき上体に着ける

使われた年代

1970  
年頃まで

使用した人々

農家



むかししまね資料館



とくちちち

作業衣です。



やんだろ



れんそう

この形からフードを連想できそうだけど、どんな使い方をしていたのかな。







# あんぼうし

## 解説

雪が降る時に防寒用具として頭に被り、雪、雨、風から体を防ぐ役目をしました。材料は「コウラ」という草を乾燥させたものを用います。体には蓑も一緒に羽織っていました。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

## 現在の姿

「あんぼうし」は「防寒ずきん」という被りもの<sup>かぶ</sup>に代わり、昭和30年頃より防寒ずきんは、使用されなくなりました。

# 冬季の被りものの防寒着

使われた年代

昭和30  
年代頃まで

使用した人々

農家の人々



とくち  
じ

降雪時に頭に被り防寒着として使用しました。

むかししまね資料館



ほんだろっ



今ではゴムやビニール製のものが使われているよ。







玉作資料館・邑南町郷土館・絲原記念館・浜田郷土資料館・  
安来市立歴史資料館・飯南町歴史民俗資料館・  
日原町歴史民俗資料館・浜田市金城民俗資料館など

みの  
**蓑**

**解説**

藁わらでできた雨具・防寒用具で、雨や雪の降るときの野良仕事のらしごとに使用しました。仕事着の上から蓑を肩から掛け紐で背負うような格好かっこうになります。紐が首と腰のあたりについていて、首の部分の紐は胸のあたりで結び、腰の紐は前に回して結びます。田仕事では、泥水がかかっても雨水できれいに流され、心配なく仕事ができます。冬は温かく、雪がついても簡単に落とせます。材料は、藁かヒロリ草が使われ、藁には、仕事用と旅用がありました。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

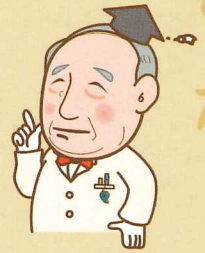
**現在の姿**

昭和30年代になると、ゴム製やビニール製の雨ガッパが使われ、旅にはレンコートなどが普及して、蓑は姿を消していきます。

**雨よけ、防寒具**

使われた年代  
**1950**  
年頃まで

使用した人々  
**農家の人々**



とくちや  
じやう

藁でできた雨具です。

むかししまね資料館



なんだろっ



は お

衣服の上に羽織って着ていたようなんだけど、どんなふうに着ていたのかな。







浜田市金城民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・  
飯南町民俗資料館・邑南町郷土館・糸原記念館など  
せん どう

## 船頭みの

### 解説

船頭蓑みのの材料は藁わらで作られています。内側は藁を編んでじょう丈夫ぶに仕上げられています。名前のおり河川で筏流し作業をする人が作業着の上に羽織ひしがたって着ていました。内側が菱型に編んで丈夫に作られています。蓑の材料には、コウラ、藁、イグサ製の莫菴ごさ、棕櫚しゅろの皮あまぐなどがあります。主に雨具として使用していました。コウラ蓑は山仕事や田仕事で使用、藁蓑は川仕事、莫菴蓑は旅行き用、棕櫚蓑は山仕事に使われていました。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

### 現在の姿

蓑に替わって「マント」という防寒着になり、現在では「合羽かっぱ」というビニール製品の上下の雨具が使用されています。

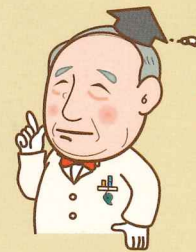
## 作業着の上に羽織る蓑

使われた年代

昭和10  
年代まで

使用した人々

筏で川出し作業をする人



とくち  
しん

藁で内側が菱型に編んであるので、軽くて丈夫なみのです。

むかししまね資料館



毛むくじら



毛むくじらで毛皮のように見えるけど、植物から出来ているんだよ。







# しゅろみの

## 解説

「しゅろみの」はシュロの木の皮製で、その軽さと風通しの良さが特徴です。蓑みのの材料は、稲藁いなわら、コウラ、シュロ皮等で、出来上がった蓑を、わらみの、こうらみの、しゅろみのと呼んでいます。また、製作方法は、材料をヘラ(木の皮)で編んだものと、材料の胴中をいったん細縄にし、これを網状に結んで蓑形に仕上げたものとの二通りがあります。種類も二種あり、肩紐ではおる風通しの良い普通の蓑ふんごと、豊後のなば師しいたけさいばいしゃ(椎茸栽培者)が伝えたという、山仕事に適した動きやすい密着形のものがあります。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

### 現在の姿

使われ始めたのはいつの時代かわかりませんが、相当古い時代からと思われます。昭和20年代からナイロンやビニール製の雨合羽あまがっぱが普及して蓑に代わり、昭和30年代には使われることはなくなりました。

# しゅろ 体に直接に羽織る棕櫚製の雨具



使われた年代

~1950  
年代頃まで

使用した人々

山仕事の人々



とくち  
じゆ  
じ

屋外作業時の雨具です。

むかししまね資料館



なんだろ？

？ わらや竹の皮などで作っているんだよ。紐ひもがあるということは…。







浜田市金城民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・  
 邑南町郷土館・絲原記念館・浜田郷土資料館・  
 飯南町民俗資料館・松江郷土館など

## ぞうり 草履

### 解説

草履という履物で、藁草履、角結び草履、紙緒草履、竹の皮草履と種類がたくさんあります。角結び草履は、足の親指と人差し指の間に挟む結び目の所が角結びとなっています。この草履を履くとマムシ避けになると言われていました。

## うつりかわり

### 現在の姿

草履は、屋外で使用する場合は消耗が激しく、長距離を歩く場合には何足分か持参して旅をしなくてはなりません。昭和30年頃よりゴム草履に替わり次第に履かれなくなりました。その後、突っかけ草履やスリッパに変わってきました。

## 素足で履く履物

使われた年代

昭和20  
年代まで

使用した人々

一般の人々



むかししまね資料館



むかししまね

屋外での履物で、主に農作業に使用しました。



きんだろう  
?

雪道や荒仕事の時、<sup>わらじ</sup>草鞋と組み合わせて使っていたよ。







邑南町郷土館・絲原記念館・浜田郷土資料館・  
安来市立歴史資料館・飯南町歴史民俗資料館・  
日原町歴史民俗資料館・浜田市金城民俗資料館など

## つまご草鞋

### 解説

雪道を歩くときに、足の先を覆う「おおわせ草履」と組み合わせて使ったほか、木出しや炭焼きといった荒仕事の時にも用いました。これをつけることで雪道も歩きやすく、足も温かくなり、ちようぼう重宝されました。つまごを作るには木製の木型に合わせて作り、わら あや藁を綾にてな編んで仕上げます。手慣れた作り手のつまご草鞋は、履きやすく足が疲れないといわれ、履く人の足に合せてにゅうねん入念に作られました。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

### 現在の姿

つまご草鞋は、現在の地下足袋じかたびへとかわっていき  
ました。地下足袋でも、足首までだけのものではなく、  
すね脛のあたりまで覆っている長めの地下足袋が、つま  
ご草鞋に近いものといえます。

## 雪道や荒仕事するとき足の先を保護



使  
わ  
れ  
た  
年  
代

1950  
年頃まで

使  
用  
し  
た  
人  
々

山仕事の人々



と  
く  
ち  
や  
う  
し  
や

はきものです。

む  
か  
し  
し  
ま  
ね  
資  
料  
館



はんだろ



昔の雪深い場所で使われていた履き物だよ。







来待ストーン・安来市立歴史民俗資料館・鹿島町歴史民俗資料館・  
 飯南町歴史民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・  
 浜田市金城民俗資料館・邑南町郷土館・絲原記念館など

ゆき

## 雪ぐつ

### 解説

藁ぐつともいいます。積雪のあるときに履く藁で作った長靴で、  
 雪踏み作業のときにも履きます。藁でできているために暖かく、  
 雪の中にはまることも少ないです。脛の部分は俵編みで、沓の  
 部分は組編みで作ります。爪先は双股式と丸形式があり、底は  
 二重担っているものが多くあります。田舎では、普段の生活では、  
 道路までの道あけや隣近所歩き、あるいは近くの町への買い物  
 に履かれていました。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

### 現在の姿

稲作でできる豊富な藁という材料と、それを自家製で編んでできた気楽に履けて感触も良く、作った人の温もりが感じられる履物でしたが、ゴム長靴の普及ですっかり姿を消しました。

## 藁製の長靴

使われた年代

1948  
年頃まで

使用した人々

雪国の人々



とく  
ち  
ゆ  
き

藁の暖かさをうまく利用した冬用のぐつです。

むかししまね資料館



ちんたろう



これをつけると不思議なことに楽に歩けるよ。







邑南郷土館・飯南町歴史民俗資料館・  
日原町歴史民俗資料館・浜田市金城民俗資料館・  
安来市立歴史資料館・松江郷土館など  
ゆき わ

## かんじき (雪輪)

### 解説

雪中を歩くのに、足につけてめり込むことを防ぐものです。形は楕円形のものも多く、丸形のものもあります。一般に、外枠はそとわくエンジュ・ヤマヤナギ・カズラ・孟宗竹など粘りのあるもので作り、もうそうだけつま先をかける部分をハナオといい、二本の長紐をシメオといねばいます。足が乗る横綱をノリオ、よこづなつま先をかける部分をハナオといい、二本の長紐をシメオといながひもいます。足につけるには、紐のかけ方、結び方にもいろいろな方式があり、うまくしないと歩行中に外れることがあります。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

### 現在の姿

かんじきを作る材料は、木・かずら・竹と藁わらでしたが、最近の外枠は、金属製になり、紐は皮製になっています。

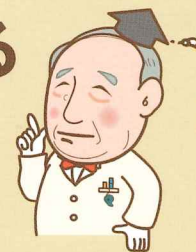
## 雪の中を歩くとき足につける

使われた年代

1950  
年代まで

使用した人々

山仕事をする人



とくち  
し  
ち

雪の中に足がめりこみません。

むかししまね資料館



ちんたろっ



農家のおじいちゃん、おばあちゃんに聞けばわかるかも。







飯南町民俗館・糸原記念館・  
安来市立歴史民俗資料館・邑南町郷土館など

てこう  
**手甲**

**解説**

手甲は、農作業などでケガや日焼け、あるいは寒さを防ぐために、  
手の甲から腕にかけて覆うように作られています。特に女性が  
野良仕事をするときには、必ずといってよいほど使用しました。  
かつては、旅人や出雲巡礼をする人は、白い手甲をして、杖をも  
ってめぐっていました。手甲を使うときには、手甲の先に糸輪を  
つけ、それを中指にかけ、中程についでいる紐で手首にくくりつ  
けて結んでいました。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

**現在の姿**

腕ぬきと手袋を一緒にしたようなものです。

**手と腕を保護する腕ぬき**

使  
わ  
れ  
た  
年  
代

**1960**  
年頃まで

使  
用  
し  
た  
人  
々

**農作業をする人**



とくち  
ゆい

手の甲を保護します。

むかししまね資料館



ちんだろ

? 山仕事するとき“弁慶の泣き所”を守っていたんだよ。







飯南町民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・  
浜田市金城民俗資料館・邑南町郷土館など

## はばき

### 解説

「はばき」は、足の脛すねに当てる巻物で、山仕事に「はばき」を巻けがき、脛に怪我をしないようにしました。「はばき」の材料は「コウラ」という草しゅろを用いました。また、棕櫚の毛を使用する場合もありました。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

### 現在の姿

「はばき」は、もともと脛の保護のための用具でしたが、「キャハン」という脛に巻くものの出現で「はばき」は消滅していきました。

## 仕事中に脛を守るための道具

使われた年代

昭和20  
年代まで

使用した人々

農家の人々



はばき編み機

参考資料

上の写真は「はばき」を編む用具です。横木であるカセには21個の編み糸の刻みがつけてあります。

むかししまね資料館



ぽんたろっ  
?

あつ

かなり厚めの着物のようだね。歩くのにもこまりそうだけどいつ着ていたのかな。







# よぎ 夜着

## 解説

この夜着は、熨斗のしのデザインがあることから、婚礼用の寝具です。  
こんれい しんぐ

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

### 現在の姿

夜着は、もともと毎日使用する寝具ではなかった  
ので、大正時代頃からは木綿かすりの緋布団（婚礼布団）に  
替わっていきました。この種の布団は、客布団として  
も使用されていました。

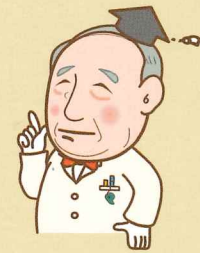
## 布団

使われた年代

明治  
時代まで

使用した人々

新婚家庭



むかししまね資料館



とく  
べ  
い  
し  
よ  
う

特別の寝具です。



ぽんだろっ  
?

形は今も昔も変わっていないよ。現在は中に入っている綿がとても軽く、暖かくなっているよ。







浜田市金城民俗資料館・邑南町郷土館・  
糸原記念館など

もめんふとん

## 木綿布団

### 解説

綿めでたの入った木綿布団で、鶴亀の日出度い図柄で婚礼布団として使っていたものです。古くは和紙で作った紙布製の着古した衣類をつなぎ合わせて綿の代わりにし、外側も紙布製の布団がありました。目方も相当重く、「鉄布団」と呼ばれていました。後には、中身は紙布で外側がつづれ織の「つづれ布団」が作られます。鉄布団は、明治末まで使用され、大正時代からは、木綿かすりが主流となり「緋布団」といっていました。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

### 現在の姿

木綿布団は、緋布団や羽根布団へと変遷しました。

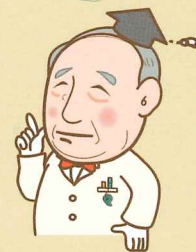
## 寝具の婚礼布団

使われた年代

昭和30  
年代

使用した人々

新婚家庭



むかししまね資料館



とくち  
しん

寝具ふとん。鶴・亀の図柄で婚礼布団として使われました。



何んだろっ



まわ くるくる回して使ったんだよ。何だろう。







日原町歴史民俗資料館・平田本陣記念館・邑南町郷土館・  
 飯南町民俗資料館・浜田郷土資料館・  
 浜田市金城民俗資料館・鹿島歴史資料館など  
 いとぐるま

## 糸車

### 解説

糸車の車は竹製で、台は木でできています。昔の農家では、  
 木綿もめんを栽培し、それを綿さいばいにして、糸車で糸にしています。糸車は、  
 主に農家の婦人が使っていましたが、その操作には、かなりの  
 熟練じゅくれんが必要でした。綿打屋わたうちやで打った綿を、糸車で一本の単糸  
 にひき、それを撚り合わせて、木綿針のミズを通るほどの細糸に  
 仕上げる人もいました。また、糸車は、木綿糸だけでなく、紙布用  
 の紙糸や繭からひいた単糸を撚り合わせて絹糸にもしました。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

### 現在の姿

使用開始年代は不明ですが、江戸時代から明治時  
 代にかけて使われていました。昭和20年前後、日本  
 国中物資が不足し、食料品ばかりか衣料品も配給制  
 となり、日常の衣服の補修やボタン着けに使う糸も  
 手に入らない時期がありました。その時、糸車を上  
 手に使って、木綿糸を作っている婦人もありました。

## よ 糸の原料に撚りをかけて糸にする道具

使われた年代

始まり不明～1950  
年頃まで

使用した人々

農家の婦人



とくち  
し  
き

綿やマユ、紙などから糸をつくる道具です。

む  
か  
し  
し  
ま  
ね  
資  
料  
館



なんだろっ



ざる  
竹の笊に紙を張りつけているんだ。







邑南町郷土館・絲原記念館・飯南歴史民俗資料館・  
安来市立歴史資料館・浜田市金城民俗資料館など

# はこ 張り子

## 解説

竹<sup>ざる</sup>箆に和紙や反古紙などを米糊<sup>こめのり</sup>で貼りつけ、その上から柿渋<sup>かきしぶ</sup>  
ぬ<sup>ぬ</sup>を塗<sup>ようき</sup>った容器です。和紙が使われているので、強くて使いやすい。  
また、箆の大きさでいろいろな容器が作れたので、重宝<sup>ちょうぼう</sup>されました。  
箆に紙が貼ってあるので、粉のようなものも入れられ、特に穀類<sup>こくまい</sup>  
の収穫には役立ちました。貼った和紙が破けても、その上から貼<sup>は</sup>  
り重ね、そして毎年柿渋<sup>かきしぶ</sup>を塗り補強<sup>ほきょう</sup>したので、長らく使用されまし  
た。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

## 現在の姿

米や豆類、胡麻<sup>ごま</sup>などの収穫には、良かったのですが、  
昭和30年頃からは、ポリ袋やビニール製の容器が使  
われだし、姿を消しました。

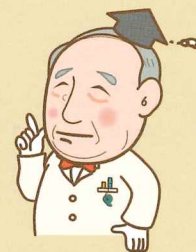
## 特に胡麻収穫に使用

使  
わ  
れ  
た  
年  
代

1955  
年頃まで

使  
用  
し  
た  
人  
々

農家の人々



む  
か  
し  
し  
ま  
ね  
資  
料  
館



と  
く  
ち  
や  
し

和紙を貼ることでリサイクル使用ができました。



ほんだろっ



ざる  
竹の笊なので風通しがいいんだよ。







松江郷土館・日原町歴史民俗資料館・  
飯南町歴史民俗資料館・浜田市金城民俗資料館・  
糸原記念館など

## めしぞうき

### 解説

夏時分、ご飯がいたまないように、おひつのかわりに使いました。  
竹を細かく割り、編み、底には丸竹を2本平行にして取り付け、  
座りが安定するようになっています。上には、割竹を編んだ鉤<sup>つる</sup>を  
つけ、蓋は竹箆<sup>ふたす</sup>を使います。ご飯が炊き上がるとこの「めしぞうき」  
に移し、食事が終わると蓋をして日陰の風通しの良いところに吊<sup>つ</sup>  
るしておきました。「めしぞうき」の中のご飯がなくなっても、ご飯  
粒が少しはついているので、日当たりの良いところに出して干し、  
からからに乾いたご飯粒を杓子<sup>しゃくし</sup>で取っていました。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

### 現在の姿

そのつどご飯を炊くことができる電気炊飯器の普  
及で、多くのご飯を保存する必要がなくなり、姿を消  
しました。

## 竹製の鉤かご

使われた年代

1960  
年頃まで

使用した人々

一般の人



と  
く  
ち  
や  
い

風通しの良い竹で編んだもので、ご飯の保存に向いていました。

むかししまね資料館



ぼんだろっ



おけ ふた  
大きな桶で蓋がきっちりハマっているね。







飯南町民俗館・邑南町郷土館・糸原記念館・  
浜田市金城民俗資料館など

## はんぼ(おひつ)

### 解説

はがま  
羽釜で炊けたご飯を移しておく容器です。杉板を組み合  
おけ  
せてつくった桶で、常に温かいご飯が食べられるように、竹か真  
しん  
ちゅう  
鍬の輪で締めてすき間がないように作ってありました。柿渋を毎  
年塗って常に清潔に保っていました。形は円形又は楕円形で、  
楕円形の場合には取手がついています。大きさは、一升飯用、  
二升飯用が一般的で、まれにいと一斗飯用がありましたが、これは  
田植えなど多くの人が仕事をするときに使われました。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

### 現在の姿

昭和40年頃になると、電気炊飯器が使われだし、  
炊けたご飯をジャーなど電気で保温します。さらに  
炊飯、保温の機能を備えた炊飯ジャーに代っていき  
ます。

## 木製で蓋つきの桶

使  
わ  
れ  
た  
年  
代

1960  
年頃まで

使  
用  
し  
た  
人  
々

一般の人



と  
く  
ち  
ち  
い

板材をすきまなく組みあわせご飯を保温したものです。

む  
か  
し  
し  
ま  
ね  
資  
料  
館



ちんだろっ  
?

今はカラフルなプラスチック製だけど、昔はうすく削った木の板だったんだよ。







飯南町歴史民俗資料館・日原町歴史民俗資料館・  
浜田市金城民俗資料館・邑南町郷土館  
緑原記念館など

## めんぱ

### 解説

弁当箱のことです。柾目の杉や桧を割って、薄い板状にし、熱湯に浸け円形とか楕円形に曲げて、その合わせ目を桜の皮で綴じ、底をつけて作ります。蓋はそれよりも少し大きめに作ります。ご飯は、身の方にいれますが、昼とコバシマ(間食)の2食分を持って行くときには、蓋の方にも詰めて風呂敷に包んで仕事場に持って行きました。おかずは、漬け物と梅干しくらいを入れてだけです。質よりも量の頃の弁当箱です。

う  
つ  
り  
か  
わ  
り

### 現在の姿

弁当箱には、弁当行李・めんぱ・箱弁当などがありました。弁当行李が夏に使われたのは、ご飯が腐れにくいからです。いずれにしても、大正時代にアルミの弁当箱が普及し、昔ながらの弁当箱は姿を消しました。

柾目の杉、桧をうすく削った板を曲げて作った。

使われた年代

1930  
年頃まで

使用した人々

山行きの人々など



とくち  
うい

薄く削られた板で作られていました。

むかししまね資料館